

青年期の飲酒行動と不安およびアレキシサイミア傾向との関連に関する研究

飯田 陽奈

わが国では、アルコール依存症、薬物依存症、ギャンブル依存症など様々な依存症の予防・早期介入・治療などが求められている。本研究では、何らかの薬物に依存症する者はその物質によって自らの心理的苦痛を自分で治療しようとしているという自己治療仮説を参考にして、青年期の飲酒行動について検討した。アルコールには不安を軽減させる効果があることから、アルコール依存症患者は不安という心理的苦痛を自分で治療しようとしていると考えられる。自己治療仮説によると、物質依存症患者の中には、自分の心理的苦痛を抑うつや怒りのように具体的に自己認知している者と、漠然としたつかみどころのないものとして感じている者がいると言われている。後者のように、自らの感情を具体的に感じる事が難しく、行動によって対処しようとする事には、アレキシサイミア傾向が関係している可能性がある。本研究では、不安とアレキシサイミア傾向と飲酒行動の関係性を量的研究（研究Ⅰ）と質的研究（研究Ⅱ）によって検討した。研究Ⅰでは、不安は飲酒行動に対して正の影響を及ぼし、不安とアレキシサイミア傾向の交互作用も影響を及ぼすという仮説は支持されなかった。分析の結果、男性において、特性不安が低い人ほど飲酒量や頻度が増加することが確認された。また、アレキシサイミア傾向の正の影響が確認され、自らの感情を同定することが困難な人ほど飲酒行動が増加することが示された。一方、女性についてはアルコール依存症状に対して状態不安の正の影響が確認されたが、標準偏回帰係数は非常に小さかった。また、アレキシサイミア傾向と飲酒行動の関連は確認されなかった。先行研究において、男性と女性では不快な感情へ対処するメカニズムが異なることが報告されていることから、アレキシサイミア傾向と飲酒行動の関連に対して、性別によって異なる影響を及ぼす要因が存在する可能性が示唆された。今後は性別を考慮した検討や臨床群との比較が求められる。研究Ⅱでは、KJ法を用いて飲酒における不安に関する語りを分類し、飲酒における不安とアレキシサイミア傾向の関係性を質的に検討した。カテゴリー分けの結果、【不安への対処】、【不安の増大】、【飲酒後の事象への言及】の3つのカテゴリーに分類された。【不安への対処】は、自己治療仮説を支持する語りで構成され、【不安の増大】ではアレキシサイミア傾向の特徴が語りに表れていると考えられた。よって、飲酒をする際の不安に関する体験や認識がアレキシサイミア傾向の強さによって質的に異なる可能性が示唆された。しかし、研究Ⅱでは、研究協力者は6名と少ないことから、研究Ⅱの結果を一般化するには限界がある。今後は、不安の高さやアレキシサイミア傾向の高さの様々な組み合わせの人へのインタビューを通して詳細に検討することが求められる。